カーライルの思想の哲學的背景

朝永三十郎

一

「ミネルヴ」の梟は多くの場合「ミューズ」の琴笛の音にはじめて喚覺まされる。神話及び傳說の搖籃より解放された希臘精神は、哲學的の世界觀及び人生觀となつて現はるゝ前に先づ抒情詩及び箴言詩の形を取つた。敎會が單に天國の鍵を保持するのみならず地上の學術、道德、政治までも支配した中世が、王侯貴人を初め多數の敎養ある人士をして爭つて哲學者の門に走らしめた哲學神化（アポテオーシス）の第十七、八世紀に轉ぜんとする過渡期は、詩人、文豪、及び雄辯家が敎會に代つて人の功業名譽を贊嘆或は否認して其の毀譽褒貶の權を掌握したルネッサンス」であつた。「ルネッサンス」にも哲學はあつたが、併し其の哲學者の多くは豐かなる詩人的の素質と天分とを具へて居る。此期を代表するジョールダノ・ブルーノー、トマソー、カムパネラの如きは現に半ば詩人であり、

而してデカート、スピノーザ、ライプニッツ等カント前の近世大思想家の思想の重要な要素が是等の詩人哲學者の中に既に豫感的に胚胎されて居る。而して更に「ルネッサンス」內部に就て見ても、其最先驅と見らるべきは、プラトーンやアリストテレースの復興に遙か先たつて現はれた、世界審判者としての詩人の至上權に據つて自らが案出した天國若くば地獄に多くの人々を送り住はしめたダンテであつた。ニュートン、ロック、ヒューム等の英國思想を佛國に輸入してラメトリー、ホルバッハに至て發展の頂點に達した佛國啓蒙哲學の端を開いたのはブルテールであつた。悟性萬能の啓蒙思潮に對して沈痛なる反抗の叫を揚げてカントの先驅となつたのはルソー及「ストゥルム・ウント・ドラング」の詩人文士であつた。カント直後の獨逸唯心論を通じてカント哲學に次いで最も重要な契機を形造つて居るスピノーザ哲學を約一世紀間の烈しき嘲罵迫害より援ひ出して新たに研究推奬し始めたのはレッシング、ゴーテ、ノヴリス等の詩人であつた。詩人文士の本領は哲學以外にある、彼等は彼等特有の世界を有するのであるが、併し大なる詩人文豪の多くは之と同時に顯著なる新哲學運動に對して陳涉吳項の役目を演じて居る。詩人文士は其感情と直觀とを學的基礎なしに端的直下に發表し得るといふ其の特權を活用して、其四圍の時代思潮に潛む何等かの

希求や缺陷やを痛感し、若くば何等か會心の外來思想に接すれば、哲學者が細心敵狀を探り綿密なる畫策によつて自己の陣容を整へるに先つて、時勢の先驅となつて新旗幟を樹立し、奇兵をはなつて敵陣を襲ひ、若くば重圍に陷つた味方の救援奪還を試みる。

哲學史上に於けるカーライルの位置も亦た斯の如き陳涉吳項のそれである。文學者としてのカーライルは第二流に屬し、之を前に擧げた詩人文士の悉くとは並置することは出來ない。其出世作で唯一の小說體の大著たる「サーター・レザータス」の形式上の落想は如何にも奇想天外的であるが、併し其れは英國小說家中彼れが最多く影響を受けて居ると言はれて居るスキフト、殊に其 Tale of a Tub を背景に置いて見れば、此點に於けるカーライルの獨創の價値は減殺されざるを得ない (E. Caird, Essays on Literature and Philosophy, I. p.243 參照)。其評論の照準と方法とはマコーレー、シヂフレー等に依て代表されて居つた當時の英國の其等に對しては眞に一新機軸を出したものであつて、之に由て彼は全然新たなる評論の風を英國に開いたのであるが、併し其れはシュレーゲル兄弟より受け得た新原理の適用に外ならない。其哲學的觀念に就て見ても其大部分は、カーライル自身が淡泊に自白して居るやうに、カント及

び獨逸唯心論の輸入である。併し英國の哲學史上に於ける陳渉呉項としての彼れの位置は決して輕視する譯には行かない。今日より見ればカーライルの獨逸哲學の理解も、從つて又た之に基いた彼自身の哲學説も餘りに單純である。獨逸哲學の解釋にしても、自己の説にしても、彼れが單純な「然り」又は「否な」を以て答へて雜作なく形づけて居る論爭問題の多くは、今日に於ては複雜なる迂絲曲折と制約付きとを以て答へられねばならぬやうになつて居る。併し原理上に於てはロック、ヒューム、リード等より殆んど一歩も進んで居なかつた(カーライル自身も、而してカーライルが移植した獨逸思想の種子を培養して英國に於けるカント派又はヘーゲル派の領袖となつたグリーンも後に其のヒューム全集の序文中に言つて居るやうに)當時の英國思想界に於て、從來注意せられなかつたカント哲學の樣相に注意し、初めて「ロマンティック」の詩人及び哲學者の思想を紹介したのみならず、更に是等の獨逸思想を取入れて成立つた自家の世界觀、人生觀、歴史觀を提げて、豫言者的態度を以て「プロパガンダ」を試みたことはまさに空谷の跫音であつた。當時カーライルと並んで獨逸思想の輸入者として擧げらるゝはコールリッヂであるが、併し哲學思想上英國に及ぼした影響より言へば到底カーライルに比べらるゝことは出來ない。エドワード、ケヤードは其

學生時期に於ける自己の經驗を談つて(Essays, I. p. 230ff)當時此「吾々がゴーテやフィヒテ、シルレルやリヒテルやノヴリスの偉大なる言葉を聽いた第一の人」が英國青年に及ぼしたの感化如何に大なりしかは今日初めて彼れの書を手にした者の到底想像し能はざることであると言つて居る。ケヤードの記述とカーライルの作物の形式とを結付けて想像して、吾々は、當時の英國に於けるカーライルの勢力の質と量とは、約二十年前の獨逸に於けるニーッチエの勢力によつて略髣髴さるゝことが出來はせぬかとも思ふ。而して此時期の青年中よりして後年如何なる哲學上の新運動が起つたか、而して此新運動及び其影響の結果とを除外すると假定して前世紀後半以後現代までの英國哲學の狀況が如何なるものであつたらうかを想像すれば、吾々は英國哲學史上に於けるカーライルの位置に充分の敬意を表したい。

二

カーライルは其哲學說を體系的に說述して居ない。のみならず、其れを英國に紹介したことが彼れの重要なる功績の一となつて居る獨逸哲學者に關してすらも、其最體系的な、精到幽微な、論述に至ては之を忠實に追蹤する忍耐を缺いで居る。併し

其思想の諸方面は一種の哲學的觀念によりて大體よく透徹統一されて居る。

先づカーライル自身の思想の消極的背景となつて居るその現代(カーライル當時)觀、殊に其直前及び當時の哲學に對する見解を一瞥せねばならぬ。カーライルに依れば現代の特徴は非英雄的、非尊信的 (not devotional)、非哲學的、非道德的等種々の語を以て形容され得るが、併し是等凡てを含め得る最適切な形容詞は「機械的」といふ語である。但しカーライルの此語の使用法は、其他の場合と同樣、其具體的擧例に於ける縱橫の諷刺と皮肉とに伴ふ脫線に妨害されて正確を缺いで居る、其實例として擧げて居る事柄は甚だ多樣に亘り、其凡てを一概念の下に包攝することは困難であるが、併し大體上手段又は方法に關する場合と、目的又は對象に關する場合とに別ち得ると思ふ。

第一の場合にはカーライルは現代の根本特徴として、人の力が無視されて機械の力が暴威を逞ふし、或は個人又は人格の意義が無視されて物質上及精神上一切の事業が機械的に組織された群衆の協同勞作に成り、學問、藝術、宗教等一切の高尚なる文化の淵源たる人格生活を沽渴せしめるといふことを擧げて居る。先づ工業に就て見よ。凡ての事が直接に手を以て爲されず一定の規則と豫定の精密なる設計とに

よつて機械により機械的に營まれる。梭は織物師の肉指を離れて機械の鐵指によつて動かされる。水夫は其帆をかなぐり棄て其橈をなげうち其職務を蒸汽の力に讓つた。經濟組織に於ても亦資本は大規模に集中されて、其運轉は定規と多數理事者の合意とに依て實行される。併し此現代の傾向は單に有形界のみでなく、無形の精神界をも支配しつゝある。先づ教育が機械によつて行はれる。ランカスター式機械、ハミルトン式機械といふが如き種々の重寶な機械が發明せられ、事みな豫定の規則と設計とによつて事務的に遂行される。吾々は又た宗教的機械を有つ。宗教は人格の感化に賴らずして、勸財や、虛榮心の煽動や、詔諛や、詭計やによつて維持される聖書會社といふ傳道機械によりて行はれる。人若し何等かの眞理を語らんと欲し何等かの精神的事業を爲さんとするならば、赤手之に向はずして先づ之に對する道具立てを整へねばならぬ。卽ち先づ多數の人々の公けの集會を開き、委員を指命し、趣意者を起草し、會食を催さねばならぬ。現代に於ては林檎の落つるを見て獨り靜かに宇宙の組織を考へ出すニュートンはあり得ない。ラファエルもなく、ミカエル・アンジェローもなく、モツァルトもなく、其代りに吾々は繪畫、彫刻、音樂の「ローヤル・アカデミー」を有する。「生活するとは一の黨派と結付くこと、若くは一の黨派を作ることを

意味する」といふ語が現代ほど適切にあてはまる時代は未だ嘗てない。國民の哲學的、文化的指導も亦た機械的に行はれる。禮を厚ふしてデカートを招聘するクリスティーナ女王もなければ、裕かでもない内努を割いてヂルテールを優遇して其敎に聽從するフレデリック王もない。唯新稅を課して哲學の研究所を設立し其設備を完全にすれば足る。

この時代の特徴は又たあらゆる學問の對象、又は目的の性質をも規定する。學問の目的は凡て物の「何」を知るに非ずして「如何にして」を知るにある。物其者の眞諦又は眞意義に徹するに非ずして唯其發生の機械作用を知るにある。隨て現代に於て最勢力あるものは理、化、生理等の機械的自然科學である。而して精神が研究の對象とせらるゝ場合にも其範は是等の機械的自然科學に取られる。第十八世紀に於て最よく此學風を代表したのはロック、ヒュームの哲學であつた。ロック、ヒュームは共に機械的物理學の原理を内外兩界に適用し、而して外界の研究は之を他の科學に委ねて哲學の本領をば内界の物理的研究に置いた。卽ち其哲學は「精神の物理學」であつて、「精神哲學」spiritual philosophy 若くは「精神の哲學」philosophy of mind ではない。其哲學の目標も結果も全然機械的である。其目的は單に吾々の意識内容又は觀念の起原の

研究又は發生史を示すに過ぎず、而して其の結果は機械的人性觀に了る。ヒュームの哲學が無神論、宿命論に飯着したのは其の自然の結果でなければならぬ。此結果よりして哲學を救護せんとして出でたものはリード一派の蘇國哲學又は常識哲學であるが、併し彼等は此結果を生み出した機械的立場を棄てることが出來なかつたから其企圖は無效に了つた。彼等は唯、相手かまはず嚙みつく猛狗の鎖を解いて自己を衞るやうに、眞僞の辨別に對しては何の能力をも有たぬ「本能」を解放してヒュームの此結論に對して自己を擁護せしめんとしたに過ぎぬ。而して現代の英國哲學と雖も原理上はロック、ヒューム、リード等より一歩も進んで居ない。而して此原理は今は更に徹底して倫理學に適用されてベンタム說となり、快樂增進術の外に道德を認めぬことゝなつた。斯くて哲學は悉く「因果哲學」cause and effect philosophy)若くは「損益哲學」profitand-loss philosophy となり、世界は大なる「製粉機械」と變じ、人は生きた魂でなく單なる苦樂計量機械 pleasure-and-pain-measuring machine となり了つた。今日に於て正當に此傾向に反對して立つものとしては一のデューガルト・ステューワートがあるが、併し其れは僅かに眞哲學の曙光を漏したに過ぎぬ(カーライルは當時の哲學中ステューワートを最厚く尊敬して居る、カーライルによれば彼はカントを論駁して居るが、併し其思想

は根本に於てはカントと一致するEssay I, p. 67)。單にロック、ヒュームの郷土のみならず、マルブランシ、パスカル、デカート、フェネロンの故郷と雖も同一の狀態にある。否な此現代的傾向は佛國に於ては更に露骨に露はれて、第十八世紀に於てはラメトリー、ディデロー、ホルバッハ等、此世紀に於てはカバニの極端なる唯物論となつた。現代に於ては吾々がステュワートを有するが如くクザンやヂルマンを有するが、併し其勢力は微々たるものである。總じて歐洲の哲學は、獨逸の其れを除く外は、機械的物理學の一種となり了つて、吾々に取て最切要な問題たる、道德的義務及び道德的自由の大秘密、時間及び空間、神又は宇宙に對する吾々の不可思議なる關係といふが如きことには毫も觸れて居ない。

これがカーライルの現代觀の大要であるが、其の所謂「機械的」の兩義中、第一の意味に於ける現代の「機械的」傾向は彼れの英雄論及び英雄中心史觀の主要な消極的背景となり、第二の意味に於ける現代の「機械的」傾向を主要な消極的背景として彼れの哲學的世界觀が成立つて居る。

(註)カーライルの現代觀を窺ふに最便利な者はSigns of the Times (Essay 2, pp. 23-52), State of German Literature (Essays 1, pp.22-73), Novalis (Essays pp.183-229) 等である。Sartor Resartusにも無論到るところに其意見が現はれて居る。此現代觀は今日では平凡ではあるがケヤードに依れば當時

の英國に於ては著しく注意を惹いて居る。

三

カーライルは自己の世界觀に到達する前に深刻なる內的乖離に苦んだ。此點に於て彼れは性格上著しき類緣を有し且つ思想上多くの影響を受けたフィヒテと不思議なほどの並行を有する。頑固一遍なルター派の信者なるラムメナウの紐織師の子はプフォールタの「ギムナジウム」に於て獨逸啓蒙思潮の洗禮を受けた。而して彼れの頭腦は巧妙な論理の上に立つた其の理神論及び決定論に推服したが、併し家庭に於て養成されたその宗教的情操は他方に於て、祈禱に聽き、理法を左右し、特別の恩寵を下すところの人格神と非決定論とを要求し、之が爲めに彼れは「頭腦と心胸との乖離」に苦んだ。而して此內的乖離よりして彼を援出したものはカント哲學であつた。律義一遍の淸教徒たるエックレフェヒャンの石工の子はエディンバラー大學に於て父母の願望に基いて選んだ神學を離れて一時は數學の研究に沒頭し、且つ第十八世紀の英佛啓蒙哲學に親んだ。而して妥協と不徹底とを嫌つた彼は尙ほ舊信仰や常識に囚はれて其前提の必然的結果を導出すに躊躇した英國の啓蒙哲學に慊らずして一旦

は佛國啓蒙哲學の徹底した機械的世界觀に就かんとした。彼は、悟性の立場に立つ以上大體ホルバッハの「自然の體系」に於けるが如き感覺論、唯物論、無神論は理論上到底避くべからざる皈趣點でなければならぬと考へた。而して理論上此の如き結論が正當であるならば、之と實行又は生活とを分離して放置することは又た徹底と誠實とを本領とする彼れの清教徒的性格の忍び能はざることであつた。斯くて彼は宇宙が「全然生命なく、目的なく、意志なく、敵意すらもなく、唯巨大な、死んだ、無際涯な、吾々の四肢を粉齏する爲めに容赦もなく冷酷に廻り行く蒸汽機關である」と信ぜざるを得ずと考へ、其幼時よりして養成された現世及び來世に對する一切の希望と絶緣し、此世界は神の製作でなく、寧ろ恐く惡魔の棲家であと感ずるに至つた。彼れが「絶對不眠の三週間」と(Froude I., p. 103)と自記した時は實に其絶望と煩悶とか頂點に達した時であつて、其の極自殺の考すら浮んで來たといふ。

此內的乖離より彼を救出したものは何であつたか。人は多く之を直接に獨逸の哲學及文學の力に皈するが、併しカーライルの性格よりするも、亦た彼れが「サーター、レザータス」中に於ける唯一の文字通りな事實と自白する(Froude I., p, 103)トイフェルスドロェックの回心又は更生の節(Book II., chap. VII)に依るも、これは餘りに單純な說明

であると思ふ。

汝は何を恐れるか。……汝の前途に横はる最恐るべきことの凡てが何であるか。死か……地獄の苦みか。惡魔や人間が汝に對して爲さんとし若くは爲し能ふ一切か。……汝は一の自由の健兒として汝を苦めつゝある其地獄を汝の脚下に蹂躙することが出來ないか。いざ！何なりとも來れ！予は潔く之に突當り之を挑まう。斯く考て來ると共にわが全精神には一道の活火漲り、卑しき恐怖を永久に一掃し了つた。予は一種不可思議の力で强められ、一の心靈となり、殆んど神となつた。……「永遠の否定」はかくして嚴然たる權威を以て予の全身、予の「我」の殘る隈なく鳴響いた。而して予の全我は神から造られたまゝの莊嚴の姿を以て反抗の力に滿ちて確立した。

此自傳的記述は何を語るか。カーライルは自から之を「回心」又は「再生」と呼んで居るが、併し彼れが茲に得たのは未だ新しき世界觀ではない。唯カーライルは、純悟性的の世界觀は到底抵抗すべからざる威力を以て自己を壓迫するが、併し之に反抗する「我」の控訴も亦等しく不可爭的に儼存し之を承認せざるを得ないといふ洞觀と不動の確信とをば得たのである。機械觀が如何なる基礎の上に立つとも「我」は儼乎として最後まで之に控告する。機械觀が如何に凡てのものを征服するとも「我」の牙城は絶對的に不可侵として殘る。われは直接に「我」をば單に外來の力の運搬者としてゞなく、其れ自身能動的のものとして、其自身力源として把捉する。但し此の如き洞觀は一の「立脚點」ではあるが未だ「休息點」とは言へない。此の時のカーライルに取ては

世界は依然として死んだ、無目的な、巨大な、冷酷な機械であるから、個人は之に對して絶えず否認、敵對の態度を取る外はない。此立場は「我」が全「非我」界に對する徹底的反抗の立場でなければならぬ。蓋しカーライルは未だ嘗て衷心唯物論や機械觀に滿足したことはない。併し以前に於ては自己內部に於ける反抗の聲は唯自己が養成された神學的世界觀の殘物であると考へて出來る丈け之を鎭靜すること、出來る丈け自己を圍繞する世界と等しく自ら一個の機械となることをば其眞理の愛に對する義務であると考へたのであるが、今の彼は、此否定の聲は傳統や染習の殘果でなくして眞の「我」の聲であるといふ洞觀を得た。斯くてカーライルは客觀より出發する機械的世界觀は其自身には全然齊合的であるが併し「我」の事實に於て到底破るべからざる障碍に逢着せねばならぬ、此世界觀は此「我」を否定し得るとしても其豫想よりして之を說明することは絕對的に不可能であるといふフィヒテの敎をば直接に自己の健鬪の力に依て洞觀したのである。併し斯の如き「我」と世界との敵對乖離は最終の狀態であることは出來ない。斯くてカーライルの努力は、彼れが「此時よりして予の不幸の性質は一變した」と言つて居る樣に更に、此機械的世界觀に對して挑戰した「永遠の否定」より一轉して、今到達した確實不可疑の立場よりして此「我」と世界とを融

和するところの新世界觀が可能ではないかといふ問題に向けられた。斯くて彼れの精神的健鬪は徐々に此世界觀、所謂「永遠の肯定」へと歩を進めて行つたのである。彼は既に機械的世界觀の爲めに威嚇されつゝあつた自我を回復し得て此處に確實不可疑の立場を發見したから、今は毫も自己の本領を缺損することなく此戰鬪に於て自己を勢援すべき與黨を自己の周圍に求むることが出來た。曩に彼は英佛啓蒙期の世界觀に接して一時は其自我を失はんとする危險を經驗したが、併し今は外來の影響の爲めに自己の人格を犧牲にし、他の勢援を受くる爲めに自己の本領を失ふ恐はない。而してカーライルは此の如き勢援を獨逸の哲學者及詩人に見出したのである。然らば是等の獨逸思想の勢援の下に如何なる世界觀が成立つたか。

九

ホルバッハの「自然の體系」はカーライルに取て何故にそれ程不可爭なものと見へたか。言ふまでもなく其れが數學的、機械的構成の結果であるからである。併し此構成は一の豫想の上に立つて居る。其れは卽ち時間及び空間に於ける形體的實體の絕對的實在――詳しく言へば相對的、主觀的と見らるゝ所謂「第二物性」を取去つて、無性

質な、單に分量上に於てのみ異なつた多數單位の集合と見られたる形體的實體の絶對的實在―といふことである。然るにカント哲學は時間空間の現象性を證明して此根本豫想を否定した。而して此點にカーライルは學としての機械的唯物的世界觀の拘束を脱して「頭腦と心胸との乖離」をのがるゝ端緒を見出した。其故に彼れは其「ノヴリス論」「獨逸文學の狀態」「サーター・レザータス」等の處々に於てカント、批判哲學、先驗哲學等の名に對して心からの讃辭を呈じ、且つカントに倣つて隨處に時間空間をば「思惟形式」と呼んで居る。併しカーライルは如何なる程度までカントを研究し、理解し、如何なる程度までカント學徒と言はれ得るのであるか。

ヘンゼルは(Hensel, Carlyle, S. 70)カーライルが「純粹理性批判」を實際に通篇研究したかを疑つて居る。フルードの與へた材料によればカーライルが初めて獨逸思想に注意し始めたのはマダム・トゥースターレルの著書の刺激に依てゞ(前世紀十年代の終り頃)あつて、最初耽讀したのはシルレル及びゴエーテであつた。カーライルが「サーター、レザータス」に記述した前述の心機一轉を經驗したのは之より間もなき一八二一年であつた。而して其翌年には「シラー」傳を書き始めて居るから、此時にはシラーを通じてカントの思想の一端には接して居たといふことは推察され得るが、併しカーラ

イルの書きものゝ内でカントの名が直接に記され、而して彼れが直接にカントの著述に接した形跡が現はれて居るのは一八二三年が初めであるといふ(Dilthey, Thomas Carlyle. Archiv für Gesch. D. Phil. IV, S. 165)。而して此處の文句("Kant's philosophy has a gigantic appearance at a distance, enveloped in clouds and darkness, shadowed forth in types and symbols of unknown and fantastic derivation"-Froude I. p. 201)によれば此時には彼れがカントを理解したといふ自覺を有して居なかつたことは明かである。但し彼は之を理解せんとの念は棄てゝ居ない。即ち一八二六年ジェーン、エルシとの婚儀に當ての面倒な儀式(ジェーン、エルシか "odious ceremony" と呼んだ)に對する恐怖を鎮靜せんが爲めに「純粹理性批判」を讀んだが併し其の百五十頁に達してそれが當時の彼れの境遇に對しては餘りに幽玄難解であつてヲルター・スコットの小說の方が却て此目的に適つて居るといふことを見出だした、といふこと(Froude I, 375.)は有名な逸事として傳へられて居る。此外にカーライルが深刻にカントを研究したといふ形跡をフルード中に發見することが出來ないことから推せば、ヘンゼルの疑ひ、而してカーライルは主としてノヴリス、フリードリッヒ・シュレーゲル等の作を通してカントを知つたらしいといふ推察は正鵠に近い樣に思はれ、而してカーライルがカントの時間及空間論をばノヴリスと

同一方向に活用して居る(後に述べるやうに)といふ事實も亦た此推測に勢援する。斯くてカーライルのカント研究、カント理解の精到深刻といふことは寧ろ否定せられざるを得ないのであるが、併し兎に角彼れが或程度まで直接にカントを讀み、若くは他の思想家を通してカントを知り得たことは爭ふことは出來ない。殊に其時間空間論は幾度となく其著作中に紹介されて彼れの世界觀の樞軸となつて居る。然らばカーライルは如何なる程度までカント說を取り、之を活用したか。

知らるゝやうにカントの時間空間論は兩樣の意義を有して居る。第一は消極的であつて、時空は形而上學的實在性を有せず、唯の直觀の形式に過ぎぬといふこと、佛國啓蒙哲學に依て代表せらるゝ唯物論々駁の具に供せられたのは此面である。第二は積極的でありて、時空は經驗的實在を有するといふこと、之に由てヒームに依て代表せらるゝ科學的懷疑說が否定せられ、自然科學の基礎づけが成立つて居る。時空は直觀の形式であつて吾々は一切の經驗の資料を時空的に整理整序せねばならぬから、經驗は悉く時空の制約の下に立たねばならぬ、而して之に依て初めて自然及び自然科學が可能となる。時空の先驗的觀念性が頓て其經驗的實在性の根據である。非空間的、非時間的のものは經驗界に於ては絕對的に起ることは出來ぬ。

カント後の獨逸哲學に於ては樣々の動機よりしてカントの時空論の消極的結果のみが主として高調せられたが、カーライルも亦た一方其影響の下に、他方自己が哲學より望んだ要求の結果として同樣の方向にカント說を活用した。自然科學が果して、若くば如何にして可能なるかの問題はカーライルに取ては重要ではなかつた。カーライルに對して重要な問題は、唯物論の專橫に對して反抗するものは單に彼自身の「我」のみでなく、更に此「我」の反抗を維持すべき何等かの學的根據がありはせぬかといふことであつた。

併し此自己の「我」の重視が又たカーライルをしてカントとは異なつた方向を取て、第十八世紀の英國哲學者中彼が最敬重したバークレーと或點までは一致した途を取らしめた。カントは實體的靈魂の存在は理論的哲學に對しては飽くまで疑問的でなければならぬとしたが、カーライルは之に反して自己の內經驗に基いて靈魂實體の存在を不可疑の事實と認め、而かもこれをば其理論的哲學の支撐點となすことか出來ると信じて居た。此點に於て彼れはカント及び獨逸唯心論の最深邃な觀念の一を逸し、尙ほ第十八世紀若くば凡俗の攀籠を脫し得て居らぬ。斯くて形體界はバークレーの場合と同樣唯の假象、單に靈魂實體の表象にすぎぬ。而して彼れは更

に又たバークレーと共に、此形體界は果して、若くば如何なる點に於て夢の世界と異なるかといふ問を提起して、又たバークレーが形體界は神が一切の靈魂に同樣に喚び起すところの表象であるとしたと同樣「眞實」界は神の現象であると說いたが、併し此點よりして彼れはバークレーと別れて、再びカントの認識論、及びノヴリス及シェリングを通して取り入れた獨逸の自然哲學の觀念に訴へた。バークレーは感覺の表象は吾々有限精神の意志に依存せぬといふことより推して有限精神以外に之をして此種の表象を有せしむる外因の存在を推論し、更に其外因は有限精神に働く、卽ち能動的であるといふことよりして其れが意志者でなければならぬこと、又た有限精神に表象を傳へ通するといふことよりして其れが表象を有するもの卽ち思惟者なること、而して其れに依て與へらるゝ感覺の表象が無盡藏にして規則正しきことよりして其れが無限の力にして叡智なることを推論し、斯くて、人格的な全知全能の神の存在、及び之と吾々との關係を概念的に論證したのであるが、カーライルは「悟性」の武器たる論理的概念は此の如き最終、最高の問題に對しては全然無能であるとして、バークレーに反對した。斯の如き問題に對しては論理的の分解又は分離の能力の代りに詩人幷に哲者學に缺へべからざる結合の能力が働かねばならぬ。但し此場

合に於ても彼は先づ認識論的考察によつて道を開かんとした。若し物質が自存的のものでなく現象であるとすれば、其れは物質ならざる何者かの現象でなければならぬ。併し此或者が何であるかは必ずしも論理的に推理せらるゝを要せず、又たせらるゝことも出來ぬ。吾々は之を把捉する爲めに唯自己の內奧の本質が何であるかを沈思するを要するのみ。唯物論に對する反抗に際して其控告を促したものは何であつたか。其れは卽ち「我」は宇宙といふ機械の一部を構成する唯の受動的な齒輪でなくして一の能動的の力、創造的な活動であるといふ直觀的確實であつた。而して吾々は、此力が吾々の精神的幷に肉體的存在となつて現はるゝが如く、此全世界が又た神といふ一の力の現象であると見なければならぬ。これは決して比論によつての推理ではない、若し吾々が肉眼を以てせず心眼を以て、論理の眼を以てせず詩の眼を以て世界を見るときに必然的に現はれ來るところの創造的直觀である。

斯の如き視點より見れば時間、空間、物體の表象は更に新しい意義を得て來なければならぬ。若し時間空間が直觀の形式であるとすれば之に對應する眞に在るものは時間でなくして永劫でなければならぬ。「時間及空間は神其者に非ず、神によつて造られたものである、神にとつては一切皆な此處、凡ての時皆な今である。」時間空間

が永劫なる神の顯現形式と見らるゝと同樣に物體又は物質も亦た神化されねばならぬ。物質は最早單に「我」に依て反抗突破さるべき無意義の死物に非ずして、神の永劫なる力の顯現である。「神の生きた衣裳」living garment of the deity である。「サーター・レザータス」中に屢反覆さる此比喩は神と此世界との關係に就てのカーライルの思想を最適切に示して居る。物質は神の衣裳ではあるが併し其れは所詮衣裳であつて其の眞の姿ではない。此點にカーライルとスピノーザとの重要な相違がある。神の無限の力は物質として現はるゝ、吾々の肉眼に對しては此形を以て顯現するが、併し其眞相を遺りなく此形を以て現はして居ない。スピノーザの徹底した「パンテイスム」は吾々自身延長の屬性の下に神の十全なる認識に到達し得ると說いたが、カーライルに取ては斯の如き認識は神の眞の姿に對比しては全然不完全なものである。卽ちカーライルの敎は「パンティスムス」に非ずして「パンエンティスムス」である。從つて又た神性の眞相に徹せんが爲には吾々は此地上の眼、時空の形式に拘束されたる認識以外の或機官、或作用を要する。然らば斯る認識は如何なるものであるか。此點に於て彼れはノグリスよりして著しき影響を受けた。

カーライルが數字を好んだことは前に述べた。彼は一時は全然其研究に沒頭し

而して一時は之を教授したこともある。彼が此數學に基いた機械的世界觀に一時傾倒したのも一部は之に由るのである。數學の眞は疑ふことは出來ぬ。其れよりして如何にして誤まつた世界觀が結果し得るか。これが一時彼れの頭腦を惱ました大なる疑問であつた。而して此疑問を彼はノヴリスに依て解決した。數學及び機械的の自然構成は眞 true である、併し終局の眞理 the truth ではない。「ザイスの學徒」が殿堂の全部と信じて居たものは單に殿堂の玄關に過ぎなかつた。而して其內奧には尙ほ大なる秘密、宇宙の生命が吾々を待つ。時空の形式を通して世界を見るも一の見方である。數學の法則に依て構成された自然研究者の世界觀も一の眞理である。併し美的直觀も亦等しく自然に法則を與へ得る。詩人の見る神祕の世界も亦た一の眞の世界、否な一層眞なる世界である。

斯くて敵視された非我の世界も今は神の生命の流れ出として、「神の衣裳」、神の「象徵」として全然別異の觀を呈じて現はれ來る。時間空間はスピノザの場合の如く神其儘の姿ではないが、併しショーペンハウエルの場合の如く神の眞相を覆ひ隱す「無明の面被」でもない。一時晝夜カーライルを慨ひ苦めた機械的世界觀は唯一の眞理ではないが、併し一の眞理であり、而して他の眞理と何等の乖離もなく兩立し、或は他の高

等の眞理に從屬することゝなる。自己內部に於ける知性と信仰、悟性と理性との分離は融和されて前者は後者の忠良なる「家臣」vassal として其使役に服する。斯くてカーライルは最の「永遠の否定」を超脱して「永遠の肯定」に入り、「汝のバイロンを閉ぢよ、汝のゴェーテを開け」といふ「休止點」に到達するを得た。

五

最後に此世界觀と密接なる內的關係を有する限りに於てカーライルの歷史哲學、歷史觀、英雄論等に簡易に接觸して置かう。

カーライルは彼が到達した前に述べた樣な世界觀を「自然的超自然主義」と呼んだ。卽ち此自然界が凡て奇蹟である、自然其者が超自然的な神力の現象、衣裳、或は象徵であるといふ意味である。併し此神の力は更により高き仕方を以て、人及び國民の間に行はるゝ「神的正義」として歷史に現はれる。「世界史」に現はるゝ此「世界審判」を見ることが歷史哲學の職分である。

歷史の發展段階に關するカーライルの根本觀念は種々の時代の著作に現はれて居り、而して其間に多少の變遷があるが、其れが最終の而して最明確な形を取て現は

れて居るものはドイデロー論(Essays V, p. 1 ff.)の結末である。此處では彼は「世界及び人間の歴史の特有の、唯一の、而して最深の題目、凡ての他の者が從屬するところの題目は、信仰と不信仰との戰鬪である。信仰に支配さるゝ時代は、其れが如何なる形の信仰であらうとも、凡て光輝ある崇高なる、同時及び後代に對して效果多き時代である。之に反して如何なる形の不信仰と雖も其れが悲むべき勝利を占むる時代は凡て、たとへ一時は假初の光輝を放つことはあつても後世に對しては消滅する。そは何人も無效果なものゝ認識に「心を勞するを欲するものなきが故に。」といふゴエーテの句を引いて、歴史を見る視點には種々あるが、其等は皆な信仰と不信仰との鬪爭といふことの下に包括さるゝといふことを示して居る。

但し此根本思想はカーライルが偶然ゴエーテより取來つたのではなくして、彼れの哲學思想と內的關係を有つて居り、且つ其精細なる論述に於ては(此處では之に立入らないが)フィヒテの「現代の特徴」よりして大なる影響を受けて居る。前に述べた樣にカーライルに依れば此世界をば其統一の原理よりして理論的に說明することは不可能である。吾々は直觀的想像の一定の形式に訴へ之を象徴として不可表現者を表現せんとするのみである。斯くてカーライルに依れば宗教史は卽ち象徴史であ

る。卽ち、カーライルが絕えず用ゐた比喩によれば、人は絕えず舊衣を脫して新衣に更むるが如く、絕えず舊き象徵を棄てゝ更に新たなる、より完全なる象徵に改めんとする、其象徵の歷史が宗敎史である。併し此象徵は直觀的想像によるから理論的意義を有しない、唯實踐的意義を有する。其眞僞、完不完は吾々が其れに依て生活し行動し得るや否やに依て定まる。之を信ずるや否やは純理論的作用によつて決定さるゝことは出來ぬ。「疑は唯行動に依てのみ除去せらるゝ。」

其故に人の最全健なる狀態は其信仰が恰かも吾々が絕えず之を呼吸しつゝあつて而かも毫も之を意識せざる空氣の如く、全然無意識無反省に保持されてゐのづから尊とき行動の源泉となつて居る狀態である。併し不幸にして斯の如き狀態は常に可能ではない。一時期に最善の象徵であつたものも次第に其力を失つて人の行動を支配せぬ樣になる。其結果として起るものは分離、懷疑、薄弱、不信の時期である。而してカーライルに依れば不幸にして第十八世紀幷に現代は恰かも斯の如き時期である。斯くて宗敎は人の行動を支配する力を失つて單なる形式となり、僞善となつた。此僞善を破壞すべき使命を帶びて現はれたものが無神論の哲學である。此哲學によつて自然は全然神の顯現又は象徵たる意味を失つて死したる機械とな

つた。此象徴を認むべき貴とき人間の心靈は凡俗な「苦樂計量器」となつた。併し、窮すれば通ずるといふ歴史の理法に依て新信仰の曙光は徐々に現はれつゝある。

斯の如き思想と密接に結付き―殊に其象徴論を中心として―且つ前に述べた現代觀の一面を消極的背景としてカーライルの英雄論が成立つて居る。カーライルに依れば前述の様な歴史の進歩は、神に「インスパイヤー」されで神及び自然の永遠の秘密をば、より完全なる象徴に於て把捉するところの人々の出現に依て制約せられる。此の如き人々が卽ち偉人或は英雄である。其故に偉人の事業の追蹤がやがて歴史の事業である。而して偉人は斯の如く常に新眞理の發見者、或はカーライルの語を假りて言へば、「自然の大典籍」の一頁一句を一層より正しく讀み得るものであつて、此神及び自然に對する、より正確なる關係といふことが彼等をして眞に偉大ならしむる點であるから、英雄の傳記は同時に眞理の歴史である。カーライルの「英雄及英雄崇拜」は吾邦に於ては恐く最廣く讀まれて居る英書の一であらう。從つてこれ以上其内容に立入る必要は無いと思ふ。

（註）獨逸哲學者中カントに對するカーライルの關係は一通り述へて置いたが、其他の哲學者に對する關係に就てはつい省略してしまつたから此處に簡單に其重要と思はるゝ點に觸れて置く。

フイヒテに對する關係に就ては種々の異說がある。カーライルがフイヒテの風格に對して深き崇敬の念を懷いて居たことは彼がフイヒテに捧げた有名な讃辭(Essay I. p. 65)が明かに之を示して居る。而して之より推して其哲學思想に對する影響も非常に大であるる樣に見る者もあるが、併し之には多少の制限を要すると思ふ。ヘンゼル (Carlyle, S. 132.)は彼は恐く「知識學」を讀まず、唯ノヴリスの書を介して之を知つたに過ぎぬと推察して居る。これが確否は別として、カーライルが「知識學」或は一般にイエナ期のフイヒテの著書を充分の同情を以て研究しなかつたことは其思想の內容より見ても、又たフルードの記述(たとへば…. I find only that he was reading Fichte, with small satisfaction, the 'Ich' and 'Nicht Ich' proving shadowy concerns.'—Froude II, p. 482)によつても略推察することが出來る。蓋し、カーライルとフイヒテとの間には其生立ち、性格、遭遇した境遇、而して其結果として起つた精神的葛藤の經路等に於て不可思議なほどの並行がある(此問題には切要な關係のないことであるが、ヨハナ・ラーンの性格とジェーン・エルシの其れ、フイヒテ對ハヨナ・ラーンの關係とカーライル對ジェーン・エルシの關係に於てまで不思議なほどの類緣がある)爲めに思想の內容上カーライルに及ぼしたフイヒテの感化が、充分誇張されて居はせぬかと思ふ。但し伯林期のフイヒテの著書の或者をば大なる同情を以て讀んだといふことは思想の內容より見ても、フルードの記述によるも確實である。殊に「學者の本領」「現代の特徵」はカーライル後期の思想即ち主として歷史哲學思想に重大なる寄與をなして居る。カーライルの「自然的超自然主義」も亦伯林期のフイヒテの思想と著しい類緣を有するが、併し其れは直接の影響の結果か、若くばノヴリスを介しての結果かは不明である。

シエリングに就てはカーライルハ其著書中屢其名を記して居るが、併し其思想其者に就ては殆んど特に言說して居ない。唯 Kantists 又は German Mystics 中に其名を數へ居るのみ。思想の內容に於ても特にシエリングの影響を認めねばならぬものは無いと思ふ。當時の英國に於けるシエリングの影響はカーライルに於けるよりもコールリッヂに於

て顯著である。

ヘーゲルの影響は更に少ない。カントをば too abstruse といひフイヒテの 'Ich' や 'Nicht' や 'Ich' を嫌つたカーライルがヘーゲルを精讀する忍耐を有せざりしことは易く推察され得る。

要するにカーライルの思想の哲學的背景には種々の要素があるには相違ないが、併しその骨子は、カントの先驗感覺論の結果をノヴリスと同一方向に適用した結果であると見るが最正鵠に近い推斷であらう。

カーライルの著作は早くよりして本邦の學生間に廣く讀まれて居るが、尙ほ近來に至つて其翻譯が盛に出版され、又は彼れに關する論文、傳記、逸事等が雜誌上に現はるゝことも昨今に至つて特に著しく多くなつた樣に思ふ。私は之を機會として或學生の集會に於てカーライルの思想の諸方面の共通背景となつて居ると思はるゝ哲學思想に就て簡單なる講演をした。此一篇は其講演の大要に多少の修正を加へたものである。此近來の現象が現代の吾邦に對して如何なる意味を有つて居るであらうかとにことに就ても多少述べたが其れは茲には省略した。